

「虐殺観劇画面越し」

—二稿—

2025/3/31

脚本 太郎

〈人物表〉

黒須 哀 (21) ↓ (41) 大学生

五十川 請 (21) ↓ (41) 大学生。復讐者

五十川 青 (17) 五十川請の妹

淀川 文夏 (17) 女子高校生

木原 春人 (37) 淀川の前クラスメイト

1. 高校・校庭（夜）

一台のバンが入ってくる。

黒須哀（21）と五十川請（21）、降りる。

二人、後部座席から淀川文夏（17）を乱暴に下ろす。

× × ×

（フラッシュ）昼の校庭の隅、ずぶ濡れの五十川青（17）。通りかかった淀川と目が合う。

2. 高校・廊下（夜）

五十川に髪を引つ張られて半ば引きずられる淀川。その後ろを興味深そうな表情の黒須。

淀川 「放して、自分で……自分で歩くから！ 痛い！」
抜けた淀川の髪が散乱している。

× × ×

（フラッシュ）昼の廊下。数人の生徒たちにリンチにされる青。通りかかった淀川と目が合う。

3. 高校・教室（夜）

黒須と五十川に追い詰められたように見下ろされながら座り込み、頭を押さえる淀川。

× × ×

（フラッシュ）昼の教室。窓の外で落下する青。席に座った淀川と目が合う。

× × ×

淀川、訴えるように二人を見上げ、

淀川 「……何なんです？ 誰ですか？」

五十川 「誰かだと？」

五十川、顔を憎悪に歪めて一歩前へ。

五十川 「てめえが殺した女の兄貴だよ」

淀川、茫然として、

淀川 「え？」

五十川 「え、じゃねえよ。妹の遺書にはてめえのことばっか書い

てあつたぞ」

淀川、何かに思い当たった様子で立ち上がり、
「違います、わたしは何も……」

黒須、馬鹿にしたような口調で、

「何も？」

淀川、黒須を見る。困った表情。

黒須 「あ、俺はただの付き添い。車出してあげただけ。……それで？ 何もって？」

淀川 「何も……してないんです。本当です。彼女を傷つけるよ
うなことなんてわたし、」

黒須 「そうだな。君は何もしなかった。虐められてたあの子を
見捨てたんだ」

淀川、身を強張らせる。

五十川 「アイツと特に親しい友達だったにも拘わらずだ」

淀川、声を詰まらせ、

淀川 「だからって、何でわたしだけ」

五十川 「お前だけじゃないさ。他の奴らも後で殺す」

淀川、愕然と、

淀川 「ころ……」

五十川、ポケットからスタンガンを出し、

五十川 「ああ」

スタンガンのスイッチを押し、電気が流れる。

五十川 「なぶり殺しだ」

淀川、窓の方に一步後ずさる。

淀川、黒須に助けを求めるような視線を向ける。

黒須、失笑。

黒須 「それと同じ目で君を見たあの子に、君はどうした？」

淀川、顔を引きつらせて目を泳がせる。

黒須、両手を広げて、

黒須 「俺も同じようにする。何もしない。君と同じようにただ
ヘラヘラ傍観して、」

スマホを取り出し、構える。

動画撮影開始。

黒須 「呑気に動画でも撮ってるよ」

淀川 「そんな……助けてよ。だってわたし、」

黒須、また失笑。

五十川 「同じ人間の言葉とは思えないな」

黒須、軽蔑の眼差しになって、五十川を指し示し、

黒須 「ねえ、被害者遺族の前なんだよ？ よくそんなこと言えるね？」

淀川 「そんな」

黒須 「人一人殺しておいて自分だけは助かりたいとかさあ、まるで人の皮を被った悪魔だよ。やっぱこんな奴死ななきやだめだね」

淀川 「殺してない。わたし殺してなんて」

五十川 「見て見ぬ振りした奴も同罪って、よく言うだろうが」

五十川、**スタンガン**を振り上げて一歩進む。

淀川、短く悲鳴を上げて後ずさり、背中を窓と壁にぶつける。

淀川 「やめてお願い、来ないで。殺さないで」

五十川、少し考えて、

五十川 「お前の対応次第だな」

淀川、ハツとした表情。

淀川 「それって……」

五十川 「誠意を見せろ」

淀川、苦悩するように、

淀川 「何を、すれば？」

五十川 「そうだな」

五十川、少し考えて、

窓にスタンガンを突きつける。

4. 高校・外観（夜）

淀川、4階の外壁のでっぱりに足を掛け、開いた窓の窓枠の下側に激しく震えながらしがみついている。

5. 高校・教室（夜）

淀川の泣き叫ぶ声が響いている。
五十川、冷たい目で、

下を見る。

黒須、震える声で、

黒須「ま、マジで殺した感じ？ え、ヤバくね？」

五十川、驚いた様子で、

五十川「お前、今頃何言ってるんだ？ **これからもつと殺すんだぞ**」

7. 住宅街（昼）

黒須（41）、下を向いて何かに怯えたように歩いている。

木原春人（37）、物陰から黒須の様子をうかがっている。

8. 裏路地（昼）

人気がない裏路地。

黒須、同じように歩いている。

路地の反対側から木原が歩いてくる。

立ち止まり、

木原「黒須、哀だな」

黒須も立ち止まる。

木原、黒須を睨み付けている。

黒須「何すか？ 誰？」

木原、無言で懐からナイフを取り出す。

黒須、何かを察した顔。

黒須「何だアンタ、ずっと待ってたのか？ 俺が出所するまで」

黒須、笑いだす。

木原「あんなしょうもない女のために？ 20年も？ ばかみてえ」

ゲラゲラ馬鹿笑いする。

木原、呆気にとられている。

黒須、さっぱりした表情で伸びをし、

黒須「いやあ、不当な理由で逮捕されて20年も無駄にして落ち込んでたけど、アンタみたいな俺よりよほど惨めな人間見たら凄い元氣出たわ。ありがとう」

木原、激昂して、

木原 「ふざけんなよ、人殺しが」

黒須 「いやそれはないだろ。俺見て撮ってただけだし、俺が人殺しだとしたらあの女も同じになるけど」

木原 「ふざけるのも大概にしろ」

黒須、ニヤニヤしながら首をかしげる。

五十川の声 「こっちの台詞だって」

五十川請（41）が木原の背後に素早く現れる。手には金属バッド。

五十川、金属バッドを振り上げる。

木原の頭に無造作に振り下ろす。

木原、目を見開き、

崩れ落ちる。

五十川「ようやく二人目」

黒須、目を丸くしている。

五十川、黒須を睨み、

血の滴る金属バッドを黒須に突き付け、

五十川「黒須、だな？」

黒須、嫌気の指した表情。

黒須 「オイオイ、勘弁してくれよ。一日二回は飽きるって」

五十川「は？」

黒須 「アンタもあの女の何かなの？ 何度も説明するのだからけど、俺は見てただけで実際に手を下したわけじゃないんだって。あの女と一緒に」

五十川「その通りだ。お前はただ無責任に見てるだけだった。実

際に手を下した俺は二十年も檻に入れられたというのに、さぞ、シャバで気楽に過ごしてたんだろうな」

黒須、驚愕。

黒須 「おい嘘だろ？ お前、五十川か？」

五十川「いかにも」

黒須 「ちよっと待てよ、何勘違いしてるか知らんがな、俺も同罪扱いされて、つい最近出所したんだぞ」

五十川、無視して、

五十川「俺はもうお前のような傍観者は信用ないことにした」
右手を上げて合図。

大勢の凶器を持った男たちが姿を表す。

五十川「俺と一緒に手を下してくれる奴だけが本当のダチだって
気付いた」

黒須、呆然と、

黒須「殺る気マンマンですよん」

五十川「いかにも」

終